

# あかしびと

宗教改革記年号 2012.10.31 発行  
日本バプテスト同盟 金沢文庫教会

ルターの信仰

「信仰のみ」

白根新治(牧師)

一五一七年一月三一日ヴイッテ  
ンベルグ城教会の扉に、ドイツの  
修道士マルチン・ルターが、当時世  
を騒がせた「免罪符」に対する質  
問状を張りだした。ヨーロッパの  
諸教会に大きな衝撃を与えた。  
やがてプロテスタント(新教)  
が誕生する。

主の弟子達によって創められた  
原始教会は、カトリックと呼ばれ、  
信仰と業を強調して長い歴史を歩  
んだが、ここに、それに抗してル  
ターにより「信仰のみ」によって  
救われるというプロテスタントが  
生れたのである。

中世のカトリック教会は、教会  
堂の補修のため、多額の費用を集  
めねばならない。そこで免罪符な  
るものを作成し、それを買うこと  
によって苦しむ魂が救われると主  
張した。修道士テルツは白い馬に  
またがってそのことを大衆に訴え、

献金を募った。

ちようどその頃、ローマに行く  
ことになっていたルターが、アル  
プスを越えて聖なるローマに行っ  
たのである。

大いなる期待をもって行ったの  
である。しかし期待に反して、そ  
こはルターの眼には地獄に見えた。  
彼は失望のどん底につき落とされ  
た。そして悲しみの中で故国の修  
道院に帰った。

これまでドイツのアウグステイ  
ン派の修道院で彼は、極めて厳格  
な律法の生活に完全を期して、修  
道生活をしたが、心に満足が与え  
られなかった。そして神を呪うま  
での苦しい経験をしていたのであ  
る。シュツタウピッツの励ましの中  
で、

「その時こそキリストの傷を見  
よ」

と、十字架上のキリストを見つ  
めることにより、平安を得るよう  
になった。これが福音の再発見に  
繋がるのである。

ヨハネ3・16にあるように、

キリストは全ての民が一人も滅び  
ないように、神の約束によって我  
らの罪を背負って死んでくれた事  
を信ずることによってのみ真の救  
いに入れられることを示したので  
ある。

その後宗教裁判を経て、修道女  
ケーテホンボラーと結婚、当時の  
世界に福音を伝え、プロテスタ  
ント(反抗する者の意)を建設して、  
今日も全世界で活発に伝道してい  
る。この日を機会にもう一度ルタ  
ーの信仰を見つめなおし、考え直  
して神に喜ばれる器となりたい。



松田みちよ

目	次
ルターの信仰 「信仰のみ」	白根新治(牧師) … 1
明石元二郎と蒋介石の墓	中山将太郎 …… 2
我家三代の愛唱賛美歌	梅谷道子 …… 3
主と共に生きる人生	久保田裕里子 …… 4
主の愛と御心を心に刻み	倉 禎一 …… 4
東日本大震災を覚えて	白根義輝 …… 5
宗教改革記念日に寄せて	倉 薫 …… 7
爆弾と神の御言葉で日本を襲撃	犬塚志朗 …… 7

## 明石元二郎と 蒋介石の墓

### 中山将太郎

御老体、御年八〇、一九三二年、台湾は岡山で、慈恵医大出の外科医の父のもとに生れ、台湾で四〇年、日本で四〇年住んだことになる。

台湾は、日本に統治されて五〇年、朝鮮半島の三五年に比べ、遙かに長い。しかし、前者が親日的で後者が反目的になったことは、一体どうしたことか？ 双方とも立派な総督府が建てられたが、台湾では大切に保存、現在でも総統府として使われているが、朝鮮では、とうの昔に取り壊されてしまった。台湾で取り壊さなかった一因に、「狗去豚来」がある。「狗」とは犬、日本人のこと、「豚」とは中国人を指している。狗はおっかないが家を守ってくれる、しかし豚は食うだけ。勿論双方とも、台湾人にとってはは外来政権、真心から歓迎するはずはない。しかし、お人好し

の台湾人は一九四五年、本当に真心から殖民統治から開放され、祖国に戻れたと喜び、大陸で毛沢東に追われ、台湾に逃げこんだ蒋介石の敗残兵と家族を迎え入れた。そして台湾海峡が彼らを守った。

ところがだ！日本人が去った後のポストを、過去大陸における群雄割拠の続きで、なだれ込んだ中国人(外省人と後日呼ばれる)どもが全部占拠、同じく台湾人の頭上に乗っかって、好き放題、やりた

い放題、甘い汁を吸った。二年後の一九四七年、あの有名な二・二八事件となったのは当然のことである。とにかく、公的機関、学校や建築中の建物に、なだれ込んで住みつき、したい放題、やりたい放題。そこで「犬去って豚来る」、または「乞食趕廟公」(乞食が借りたお寺の坊さんを追い出して住みこんでしまった)になり、今日に至った。私が台湾を棄てた一因である。

しかしそれだけなら、またよい。当時の外来者は、日本人と違って文化程度が低く、水道、電灯や汽

車など見たこともない田舎者が多い。水道の蛇口を買ってきて壁に刺し込み、水が出ないといつては金物屋さんに怒鳴り込んだり、墓地の上かまわず過去の習性から、我先にとバラックを建てて住み込んだ。

後日、台北市長の陳水扁氏と台湾長老教会総幹事の高俊明牧師(私たちの文庫教会に説教に來られたことがある)が、彼らに市外の家を与えて追い出し、元の日本人墓地に戻した。今は、「林森公園」になっている。

そこから第六代台湾総督、明石元二郎中将の遺体が掘り出され、市外のキリスト教墓地に改葬、安眠することができた。その近くにテレサ・テンの墓地があり、何時も彼女の歌声が流れている。

ここで特記に値するのは、第六代台湾総督として赴任した明石元二郎は、台湾風土に馴染めず、病に倒れ、療養のため九州に帰ったが、残念ながら一年で亡くなってしまった。遺言で屍を台湾に戻して、台湾の土に埋めてくれと言っ

た。

泣けるではないか！

この墓場の上に、大陸から逃げこんだ蒋介石の敗残兵どもが住みつき、しかも明石の墓の真上に便所を造ったのである。

ところが二、三年前、後学のため、わざわざ友だちに連れられて、家内と台北市郊外に蒋介石の墓を訪れたが、大きい墓苑が確保され、その中の古民家の一室に、床から四、五〇センチメートル高い大理石の上に、蔣の大理石の大きい棺が安置され、しかも、衛兵が守りに立っている。将来大陸に改葬するといのである。明石元二郎と違い、台湾の土に触れようとしないのである。

台湾で王の如く仕えられ、死んで反攻大陸が成功した暁には、大陸の故郷に持ち帰って改葬せよとの、御遺言である。同じ統治者として、異民族の明石元二郎と同胞を標榜する蒋介石一派、台湾人にとり、どつちがイエスの譬え話に出てくる善きサマリヤ人であるかは、一目瞭然である。

墓は、その人の一生を語り、その人生を総括する。軽々しく造るものではない！



## 我家二代の

### 愛唱賛美歌

梅谷道子

- 1 天なるわが家を あおぎみれば  
涙にかすめる 目も晴れけり
- 2 はげしきこの世の あだをふせぎ  
飛びくる火矢をも 恐れで立たん
- 3 なやみは波とも 打たばうてよ  
うれいは雨とも 降らばふれよ
- 4 ときわに住むべき あまつ家に

のぼりてゆく身に 何かはあらん  
5 あらしのおそわぬ 主のみもとに  
つかれしわがたま 長くやすまん

年を重ね、目が弱り、こころ、二年あまりテレビに関心のない私が、「梅ちゃん先生」だけは、よく見る。戦前から高度成長が盛んな頃までの物語。父親が大病院の医師、娘は町の人たちに頼りにされている個人病院を開いている。そこに大病院が進出し、「経営危うし」というのが、後半の設定なので、個人病院の良さが見直されるのだと想像する。両方の病院を経験している私は、双方に長所、短所があると思う。

そこで、すぐに思い出すのが、終戦の年、三歳だった二番目の弟「恵二」を、たった一晚で亡くしたことだ。大病院なら、今なら、助かったかもしれない。十月の日曜日、父と私、長男で年子の弟の三人は、教会の遠足で山へ。家では祖母、母、乳呑み児で三男の弟、そして恵二が残った。登校してい

るとき以外はいつも一緒に「ネエタン(私)」がいないので、退屈した恵二は、一人で庭ぎりぎり迄、坂を降り、近所のいたずら坊主たちの泥合戦を見物していたらしい。崖の上から、下の道めがけて投げ落とされた赤土の塊が頭に当たり、土をつけたまま、泣いて戻ったそうだ。その晩から吐き続け、翌朝小さな村医に駆け込んだが、駄目だった。山から帰ってからずっと、「神様、恵ちゃんを死なせないで下さい」と、声に出して祈り続けた私の願いは聞かれず、悲しさに狂った私は、

「神様なんかいるもんか！」  
と、叫んで、手当たりしだい物をつかんで投げつけた。日頃、素直でいい子の私(本当ですよ)の荒れように、母親が恐ろしくなり、「恵ちゃんがあんまり可愛いから、神様が『早く天国においで』とお連れになったんだよ」  
と、深い悲しみを抑えて諭してくれたことを思い出す。  
恵二は、祖父の愛唱賛美歌「天なる我家を」が大好きで、母親に

「アmenaウ、ヒイテ」とせがんで  
は可愛い声で歌っていた。彼は、  
歌と言えば、これだけ。それも一  
番しか歌わなかった。今、五番ま  
である歌詞を読んでも、短い生涯  
だった彼にびつたりだと思ふ。古  
い賛美歌だが、残された家族もよ  
く歌い、私の愛唱歌でもあるので、  
私の没時には是非、歌ってほしい。

今、天国にいるたくさんの親族、  
友人、知人、恩師の中で、この弟  
に真つ先に逢いたい。その為には、  
早く悔い改めて、天国に入れて戴  
かなくてはと思う今日この頃であ  
る。



松田みちよ画

## 主と共に生きる人生 久保田裕里子

私が本格的に自身の中で信仰を  
意識して三十余年。

それまではと言うと、信仰に頼  
る人は弱い人間のことと思っ  
ていました。そのような時、ふ  
と目にし、心に留まった聖書の  
数々の御言葉や、何気なく歌っ  
ていた賛美歌が、なんと心打つもの  
であるかと気づきました。そして  
今までの人生が一気に虚しいもの  
となりました。

神を意識して人生を送ると、私  
の選択ではなく、神に導かれる人  
生だと理解しました。イエス様が  
今日という日を、どのようにして  
下さるのだろうと考えると不思議  
にわくわくしてきます。神を信じ  
てない時から主の御計画によって  
生かされていたとつくづく感じま  
す。

すっかりイエス様にはまってい  
ます。  
これまでの信仰生活いろいろあ  
りましたが、ここ文庫教会で、夫

婦共々教会に連なり、信仰の分か  
ち合いができることは、神様の深  
い憐れみと導きであると思えます。  
誘惑や罠に陥り、信仰の失格者  
とならぬよう、日々祈りと聖書に  
親しみ、神を畏れ、礼拝を守るこ  
とのできる歩みが続けられるよう  
神に祈ります。



松田みちよ画

## 主の愛と御心を に刻み

倉 禎一

(この原稿は先回のペンテコステ号に掲  
載すべきでしたが、紙面の都合上、今  
回に掲載させていただきました。)

また今年も「イースター」とい  
う、意義ある時を神が備えてくだ  
さった。

そこで、私はレントの時期に、  
ルカによる福音書を最初から読  
み進めてみた。すると、御子イエ  
ス様の御旨のお働きと、父なる神  
に熱心に祈られる主のお姿を私  
は知ったのである。恐怖の故に、  
思わずイエス様を裏切ったペト  
ロや、明らかに裏切りを企てたユ  
ダにも、そして、ゲッセマネで、  
やがて十字架に架けられる恐怖  
を振り払うように祈られるイエ  
ス様の傍らで、弟子数人が、主の  
恐怖を彼らなりに悲しむ中で、不  
覚にも寝込んでしまう……。これ  
らの弟子たちにも深い憐れみを  
示されるイエス様は、何よりもイ  
エス様を敵とし、卑劣な限りをし  
尽くした彼らにまでも、主は「そ  
の罪を赦したまえ」と父なる神に  
祈りを捧げられたのである。

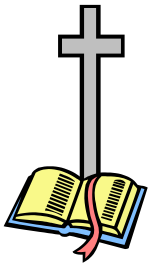
ルカの聖書で、イエス様が十字  
架にお架かりになり、息を引き取  
られるまでの足取りをこう理解  
した私は、四月八日のイースター

礼拝に臨んだ。そして、神の御心による「主の復活」という測り知れない出来事を再認識したのだ。

とはいえ、毎年、これらのイエス様の一連の出来事を、聖書を読み、御言葉を耳にするのだが、今回は主のご生涯と、私たちへの神の御心を、より深く心に刻むことができた。

「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という御言葉があるが、主が私を捉えてくださったと確信する。

とるに足りない、心の弱い私の信仰を、イエス様はなお導いてくださると信じ、悔い改めと祈りをもって、主の業としての道を歩んでいきたい。



## 東日本大震災を覚えて

白根 義輝

昨年8月、ルーテル教会が行っている東日本大震災で被害に遭われた方たちを応援するボランティア活動に、勤務先の横浜英和小学校の同僚の4人の先生と一緒に、「チーム横浜英和」として参加しました。

初日は、宮城県のルーテル仙台教会にある「ルーテル支援センター」となりびと」という、ボランティアの人たちが泊まる施設でお世話になりました。礼拝堂の長椅子を向かい合わせにし、寝袋を敷いて休みました。

翌朝6時、眠い目を擦りながら2時間近くかけて、作業地の石巻に移動しました。横浜から5時間以上かけて仙台に着き、随分遠い所へきたなと思いましたが、教会でお会いした方々は、兵庫県や島根県で働いているノルウエーやフィンランドの4名の宣教師の人たちや牧師、またはるる九州の熊本からいらした親子もいました。

結局、横浜から来た私たちが、一番近いところからの参加者でした。寝泊りは、村で提供していただいた公民館で、板の間に寝袋でしたが、昼の労働が睡眠薬となり、ぐっすりと眠れました。

なぜ私がボランティア活動に参加したと思ったのか、ルーテル支援センターとなりびと」の名前の中にもある、「となりびと」、この言葉がキーワードとなりました。ルカによる福音書の中にある有名なイエス様のお話、良いサマリヤ人のお話を思い出してください。イエス様が、「となりびと」とは、誰のことですか？と聞かれた時に、その答えとしてお話になりました。

一人のユダヤ人の男の人が、山の中で、強盗に襲われ、殴られたり蹴られたり、死にそうなくらいひどい目にあって、倒れていました。大声を出して助けを呼ぶこともできないほど弱っていました。きつと、心の中で、声にならない声で、「誰か助けて！」と言いつづけていたと思います。

そこに、3人の人が通りかかりました。まず初めに、祭司、そして祭司のお手伝いをするレビ人、この二人のユダヤ人は、大げがをして苦しんでいる人を見たのに、さっさと通り過ぎてしまいました。そして、3人目に通ったのが、サマリヤ人です。ユダヤ人から嫌われていたサマリヤ人でしたが、親切に傷の手当てをし、ロバに乗せて宿屋まで連れて行ってあげたお話です。

このお話の最後にイエス様は、「この三人の中で、誰がとなりびとになりましたか。」と聞かれました。もちろんサマリヤ人ですが、「行って、あなたも同じようになさい」と言われました。

大地震の後、テレビや新聞で毎日のように、町全体が津波で流されたり、家族が亡くなったりと、被害の大きさが伝えられています。そのうちに私は、強盗に襲われた人の心の声、「誰か助けて！」という声を、被害に遭われた人たちも、同じように叫んでいる、と思うようになりました。また、そ

の叫びと、「行って、あなたも同じようにしなさい。」という、イエスの言葉が、心から離れなくなってきました。

そして、一度は、自分の目で被害の様子を見、お手伝いしたいと思うようになり、ボランティア活動に参加したわけです。

初日の活動は、個人宅の雑草抜き、床下のヘドロ出しを、約三十名で行いました。その家の御主人が、休憩時間に、ポツリ、ポツリと奥様を亡くされたことなどを話されました。5か月を経過して、やっと震災当時のことを話せるようになったとのことでした。

二日目は、2班に分かれての作業でした。水産加工業者の鉄骨だけ残った作業所の清掃や、海に注いでいる沢の清掃です。山の奥まで、網や箱、運搬用パレット、風呂おけなどが押し流されています。

三日目は、水田に流れ着いた品々の掘り起こし作業でした。洋服や食器類などの生活用品が多くありました。被災者の方の生活の

様子を思い浮かべながら、黙々と作業を続けました。ミニカーなどのおもちゃが出てきた時は、本当にショックでした。そのおもちゃの持ち主が楽しく遊んでいる姿を思うと、なんとも言えないやるせなさを感じたことを忘れられませんが。

毎夕食後、その日の作業の反省や感想をシェアする時が持たれ、自分では気が付かなかった考え方や見方に触れ、大変勉強になりました。

また、私たち小学校教師のために、作業開始前に、車で二〇分の所にある大川小学校へ案内してくださいました。大川小学校では、一〇八名の児童の内、七四名が、また一三名の教師の内一〇名が津波の犠牲になりました。

そこには、ロッカーにあったであろう衣類や靴などが並べられていました。亡くなった子どもたちが、勉強したり、グラウンドで走り回ったり、その楽しげな学校生活の様子を思い浮かべると、深い悲しみに襲われ、皆、涙を禁じ得

ませんでした。

報道や映像だけでは分からなかった壊滅的な現実を見て、物理的な復興も心の癒しも、長期に亘ることを実感させられました。

そして今年の夏、横浜英和小学校の保護者の方々をお誘いし、二泊三日で宮城県南三陸町に行ってきました。保護者の方々が、被災地に行きたいという願いを持ちながらも、様々な制約があるため実現できないという声がありましたので、学校がボランティアツアーを主催することにいたしました。参加者の内訳は、保護者十六名、児童九名、教師十一名、計36名となりました。

作業は、海浜のがれき撤去で、当日は日差しが強かったため、疲労困憊となりましたが、全員奉仕活動を終えて、満足気な様子でした。

夕食後、バプテスト同盟錦織教会の藤岡牧師をお招きし、日頃なさっていらつしやる支援活動や問題点などについてお話ししていただけのことでも感謝です。

二回目の被災地訪問を終えて、今後も、自分でできることを考え、そして、実行していかなければと、思いを新たにすることができました。



水田清掃



へドロ出し

## 宗教改革記念日

によせて

「神はわが砦」

倉 薫

1 神はわが砦 わが強き盾、  
すべての悩みを 解き放ちたもう。  
悪しき者おごりたち、

邪な企てもて 戦を挑む。

2 打ち勝つ力は われらには無し。  
力ある人を 神は立てたもう。  
その人は主キリスト、万軍の君、

われと共に たたかう主なり。

3 悪魔世に満ちて 攻め囲むとも  
われらは恐れじ 守りは固し。  
世の力さわぎ立ち 迫るとも

主の言葉は 悪に打ち勝つ。

4 力と恵みを われに賜る

主の言葉こそは 進みに進まん。

わが命 わがすべて 取らば取れ。

神の国は なおわれにあり。

「神はわが砦」(讃 21・377)は

「ドイツ史上最高の時期に、最大の人物、ルターが作詞・作曲した最も偉大な賛美歌である」という批評があり、彼の代表的賛美歌であるばかりでなく、あらゆる賛美歌のうちの代表作の一つである。これがいつ作なのかは諸説あるが、一五二九年ヴィッテンベルグで出版されている点から、一五二七年

から一五二九年の間の作と推定される。詩編四六編の冒頭部に基づく創作で、まことに力強く、彼の信仰をよくあらわしている。(賛美歌の歴史と背景より)

一九六六年四月に神様の御手にキャッチされた私は、四六年間毎年のようにこの日を迎え、この賛美歌を歌ってきた。これほど強く心に響いた宗教改革記念日の礼拝を守ったことがあるうか。

これから何年この歌を歌っていくかは私にもわからないが、神様が「もう私の所に帰っておいで」と言われるまでこの歌を歌って、ルターがどの様な思いで作ったのかを少しでも理解できればと、祈り願いつつ、ペンを置きます。



「乙女の祈り」二部模写 中山将太郎画

世界大戦中は爆弾で、  
戦後は神のみ言葉で、

日本を襲撃した

米国兵士が

宣教師に転身

犬塚志朗

米国から帰朝した友人が我が家を訪れ、米国で出版されているある本を私に見せました。その最後のページに掲載されていた写真を見てびっくり！中央に大きく紅顔の美少年(?)が写っていました。それが大学時代の私なのです。早速その本をとり取り寄せたところ、一年近く経って届きました。そして読んでみてとても感動しました。その内容をここに紹介します。



主人公ジェイク・デイシエイザーは、世界第二次大戦中、日本人の真珠湾攻撃によって2400人以上の米国人が殺戮されたことに対して復讐することを誓いました。

そこで米国最高機密・伝説的急襲爆撃手として志願して、日本の上空にB-25爆撃機で飛び立ちました。

ある日、日本の上空を低空飛行していたとき、畑で働いていた農夫が自分に手を振っていました。味方の突撃機と見間違えたのか、友好的な表情が見えるほどの低空だったとのことです。

やがてあたり一面に濃霧が立ちこめ、長い間暗闇の中をさ迷ったあげく、中国の日本人占領地区にパラシュートで着地してしまいました。そして日本人兵士の捕虜となりました。やがて日本本土に送還され、約四〇ヶ月の捕虜生活で、空腹、病氣、残忍な取り扱いを受け、厳しい環境下で、仲間の捕虜が次々と亡くなつていきました。

「どうしてこれほど憎しみ合うのだろうか」

と、考えていた時、信じられない事ながら、日本人の番兵より英語の聖書を渡されました。

独房ごとにの廻し読みでしたが、自分の番になった時、神の許しと贖いのメッセージを食るように読みました。

「このやつれ衰えた自分の体を守ってください」

と祈り、そして敵兵である日本人を許し、日本人のためにも祈るようになりました。

やがて雨が降り、独房の天窓から雨が降り注ぎました。その雨水中で神様から直接洗礼を受けたのです。そこで野蛮に見える日本人のために宣教しようと決意しました。やがて終戦を迎え、帰米の後神学大学(Seattle Pacific College)に通いました。そしてフリーメソジスト派の宣教師として再来日したのです。今度は爆弾の爆撃手としてではなく、神のみ言葉の爆撃手として。

ジェイコブ・デイシエイザーについてはインターネット英語版では教箇所が登場していますが、日本語ではどこにも見当たりません。

その宣教師の自叙伝が母校の神学大学から出版され、米国で販売されました。その宣教師が関った名古屋のフリーメソジスト教会の献堂式の日、私たちの大学二十人のグループが聖歌隊員として参加し、私が中央で讃美していただきます。その写真が本の最後のページに掲載されていました。

その表紙の帯に

An Annual Million Seller

(年間百万冊以上売れる本)

と書かれてましたので、それが事実だとすれば、当時私の写真を毎年百万人の人々が見たことになります。



あかしびと 宗教改革記念号

発行日 2012年10月31日

発行所 日本バプテスト同盟金沢文庫教会

住所 〒236-0046 横浜市金沢区釜利谷西 3-36-20

Tel/Fax 045-783-5475

発行者 牧師 白根新治

印刷所 (株)高陽印刷所

住所 横浜市南区白妙町 3-39

電話 045-251-4832